

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

昔話の口承と地域学習の展開：岩手県遠野市の「民話のふるさと」づくりと語り部たちの活動

著者	佐藤 一子
出版者	法政大学キャリアデザイン学部
雑誌名	法政大学キャリアデザイン学部紀要
巻	10
ページ	339-382
発行年	2013-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/8010

研究ノート 地域学習論（2）

昔話の口承と地域学習の展開

——岩手県遠野市の「民話のふるさと」づくりと語り部たちの活動——

法政大学キャリアデザイン学部 教授 佐藤 一子

はじめに

研究ノート（1）（2011年度本学部紀要）⁽¹⁾の「はじめに」で述べたように、本研究は、1980年代に筆者がアクションリサーチによって措定した「文化協同」という地域文化活動モデルをその後の日本社会の変容過程に即して検証し、「地域学習」モデルとして再定義する作業にむけた事例研究の一環をなしている。「地域学習」モデルへの移行を検討する必要にせまられたのは、「ソーシャル・キャピタルが人々の市民活動を活発化させ、また市民活動を通じてソーシャル・キャピタルを豊かに培うという地域再生にむけた循環」の過程において「持続可能な地域社会形成の歴史的プロセスと主体の継承性」の問題を明らかにすること⁽²⁾が重要な現代的課題となってきたからである。

1960年代後半以降の都市化状況のもとで全国各地に多様な市民活動が生まれ、地域文化の創造的発展がみられたが、その後「その担い手たちが現在も地域社会の構成員としてみずから参加してきた地域形成をどのように次世代に継承するのか」⁽³⁾という振り返りの過程と世代間継承の問題が新たに生じている。次世代への世代間継承という問題は地域文化の継承の問題にとどまらず、その後には生起している少子高齢社会における地域社会組織の維持、地域社会における生業と経済基盤の衰退の歯止め、地域社会における人々のアイデンティティ形成など、地域社会の再生をめぐる複合的な諸問題を内包している。

その意味で「都市化と社会教育」という課題が社会教育全体の新たな展開を方向付けた1960年代以降の歴史にもう一度立ち戻り、「地域再生と社会教育」

の視点から地域の学習文化活動史を振り返る考察が求められているといえよう。本研究では高度成長期から積み重ねられてきた市民の学習活動史をふまえ、次世代への継承を可能にする学習過程に注目し、グローバル社会におけるローカルな地域づくり学習の意義、そのあり方を探っていきたい。

このような現代的課題をめぐって、社会教育研究では「地域創造学習」⁽⁴⁾の提起や「ローカルな知」⁽⁵⁾への注目など、地域社会にねざし、地域社会の諸課題をテーマとする学習の展開に関心が寄せられつつある。「ローカルな知は『暗黙の知』『個人的な知』『伝統的な知』『親密性の知』『状況に埋め込まれた知』『非西欧の知』『民俗知』等の用語と親近性を保っている」⁽⁶⁾と前平泰志が指摘するように、ここでは成人の認識と行為の関係を、地域共同体の構成員の経験・生活知の蓄積と相互伝達、地域社会の習俗や伝統的な地縁性、地場産業の技術継承などの過程と関連づけながら学習過程分析をおこなう視点や方法が求められている。なかでも廣瀬隆人がとりあげている「地域学」の動向は、筆者の関心と重なりあう点が多い。廣瀬は「都市型の生活文化が風土に適合した伝統的な生活様式を駆逐するという事態を地域に住む生活者としてどのように生きていくのか、地域学は、その危機感や困惑の所産として生まれた」⁽⁷⁾ととらえている。

本稿では、こうした「危機感や困惑」をむしろ先取りしつつ、1970年代から「民話のふるさと」という地域イメージを先駆的に打ち出し、歴史的文化的伝統と環境を資源として活用する自立的な地域づくりを進めてきた岩手県遠野市の事例をとりあげ、特に昔話の口承をおこなってきた語り部たちの存在に注目する。

遠野市の事例調査研究を目的として、2012年2月から10月にかけて5回の現地訪問をおこない、地域づくりの担い手たち34人のインタビュー調査を実施した。あわせて岩手県釜石市・山形県新庄市・山形市・南陽市、福島県伊達市梁川町の5カ所の昔話の会を訪問して16人の語り手のインタビューをおこなった。この調査研究では雪だるま方式による半構造化インタビューを重ねており、その調査はまだ終了していない。また昔話の語り手に対してはライフストーリー・インタビューとグループ・インタビューを実施している。

遠野市の事例研究において欠かすことができないのは、「民話のふるさと」を体現している語り部たちの存在である。「民話のふるさと」づくりが遠野市のまちづくり政策にすえられていく段階で、昔話はもはや家庭で親や祖父母が労働・家事の合間に思い思いに子ども・孫たちに語ってきかせる習俗としての子育て文化にとどまらずに、地域の無形文化財として認知されるようになった。語り部とよばれる人々のなかには、江戸期、明治初期に生まれた故人、80代から90代の高齢者もいる。本稿では世代間継承という関心から、「後輩」の「新しい時代の語り部」⁽⁸⁾といわれている「いろり火の会」に注目したい。「先輩」語り部たちが1970年代から活動し始めているのに対し、いろり火の会の発足は2000年であり、後述するように活動の仕方も「先輩」語り部とは異なっているという点で「第二世代」ということができる。

社会教育研究としては大田堯が先駆的に明らかにした「習俗としての子育て」（ヒトが人になること）⁽⁹⁾、北田耕也が提起した民衆文化論（大衆が民衆になるということ）⁽¹⁰⁾などの先行研究をふまえ、昔話の文芸的意義にとどまらず、「声の文化」⁽¹¹⁾として生活の中で「語り継ぐ」行為の意味に注目する。そのことが他者によって受け止められ対話的に再生されていく共感関係や生活知・地域認識の深まり、地域社会全体に広がる相互の学び合いなど、地域学習の展開という視点から考察を深めることが課題となる。

さらに注目される点は、遠野の昔話の口承が遠野の地域文化の域を超えて全国の昔話を語る会の活動や社会教育における地域学習の推進とも関連していることである。たとえば山形県の場合、知事主導で始まった「ふるさと塾」が県教育庁生涯学習振興課の基幹事業となり、県民運動として県下全市町村で昔話の伝承や太鼓などの伝統無形文化財の保存活動が推進されている⁽¹²⁾。また東北から九州にいたる各地で民話のサミットや昔話祭りが開催されている。これらの場に遠野の語り部はたびたび招かれている。昔話の語りの会は全都道府県に存在しており、その多くは公民館・図書館・博物館・郷土資料館・伝承館などを活動拠点としている。遠野市の語り部活動は、遠野市の伝統文化の保存・継承という限定的な意味を超えて、全国的なネットワークをもつ地域文化運動の一環をなしているといえよう。

2011年3月11日の東日本大震災に直面し、被災地における昔話の語り手グ

ループが大震災を語り継ぎ、被災者とともに地域の記憶を共有する活動を広げていることも新たな動きとして注目される。宮城県山元町やまもと民話の会は、自分たちも生命を脅かされるような体験をした被災者として、多くの住民の「巨大津波」の体験の聞き書きを続けている⁽¹³⁾。遠野の語り部グループも、後述するように大震災支援ボランティアとして大きな役割を果たしてきた。東北地方に濃密に分布している昔話を語る会の活動が、広島・長崎・沖縄・東京など各地の戦争体験を語り継ぐ活動に連なる実践として新たな意味を持ち始めている。昔話の口承活動を共同学習・サークル運動や自分史の記録などの戦後社会教育実践の系譜に位置づけ、地域の記憶を継承する共感的・対話的な表現活動を通じて共同体のアイデンティティ形成に寄与する地域学習であるととらえ、その今日的な意義を掘り下げていきたい。

以下では、その予備的考察として「民話のふるさと遠野」（2006年の基本構想では「永遠の日本のふるさと遠野」とされた）の地域づくりと語り部活動の展開について概観しておくことにしたい。

1. 「民話のふるさと遠野」の再発見

遠野市は、1954年12月に1町7カ村の合併によって誕生した。2005年に宮守村を合併し、旧町村単位に9カ所の地域（遠野、綾織、小友、附馬牛、松崎、土淵、青笹、上郷、宮守）に区分された南北38キロ、825.62キロ平方キロメートルの広大な地域に立地する人口3万人弱の自治体である。江戸時代、あるいはそれ以前から三陸海岸部と内陸地方をつなぐ交通・交易の要衝の地として栄え、南部藩城下町・市・宿場町として盛岡に次ぐ賑わいをみせた。農業、観光を中心に独自の地域づくりが進められており、全国的に知られている地域である。

「民話のふるさと遠野」という表現は、1970年の岩手国体や国鉄のディスカバー・ジャパン・キャンペーンをきっかけにしてふるさとブームがまき起こったとき、「俗化されていない大自然」「民話のふるさと」とうたわれて定着した。1971年には遠野市独自といわれている市民センター構想が具体化され、センターのこけら落としとして語り部の鈴木サツが昔話の語りを披露するとともに、市民創作ミュージカル「遠野物語ファンタジー」や芸能祭などの活発な活動が広

がっていった。『遠野 市制20年の歩み』によれば、「民話のふるさと遠野」のイメージは次のような経緯で定着していったとされる⁽¹⁴⁾。

1960年代の高度成長の波に乗り損なった遠野地方が、逆に後発の利点を享受できる立場に立ったのは、まことに皮肉な現象である。大企業・重化学工業を地元を持たず、農業と畜産に重点を置いてきた遠野郷には、さいわいなことに公害のない自然がそのまま残されていた。しかもそこには人間性を温存した伝統文化が息づいている。この汚染されない自然と文化は、今後いっそう重要性を増すはずのものである。(中略)

遠野の文化を考えると、どうしても見逃すことのできないものに“民話”がある。この地方に語り継がれてきた無数の民間伝承は、たまたま明治年間に一部文字化される幸運にめぐりあった。遠野出身の佐々木喜善氏が物語った民話を柳田国男氏が『遠野物語』にまとめ、明治46年に出版したのであった。その刊行60周年を記念して昭和46年3月、遠野駅前ロータリーにたてられたのが遠野物語記念碑である。

柳田国男の『遠野物語』は1910年に刊行された。語り手の佐々木喜善が生まれ育った土淵村(現土淵町)の「伝説」「世間話」を中心に、遠野地方の沿岸部と内陸部の人・馬による交通・交易、市によって賑わっていた遠野町と周辺の各村、沿岸部から遠野盆地に至る山々や峠、人々の信仰の対象となっていた早池峰山などに伝わる伝説や昔話119話が含まれている。日本民俗学の創始を告げる『遠野物語』であるが、遠野市民が『遠野物語』をふるさとの誇るべき文化として認識するようになったのは、この記念碑建立をきっかけとしているとされる。高度成長の影響を受けて人口流出が始まり、新しい地域づくりを模索しようとする時期に、「民話のふるさと遠野」がいわば地域固有の財産として再発見されたのである。

それまで1950年代から60年代にかけてほとんど関心をもたれていなかった『遠野物語』や遠野郷に伝わる数多くの昔話を採集し郷土文化への関心を寄せてきたのは、小中高校の学校教員たちであった。遠野物語研究所客員研究員・主幹として、遠野の昔話と語り部たちの研究に関わってきた石井正己は、その

経緯を明らかにしている⁽¹⁵⁾。

石井によれば、1950年に遠野高校社会研究会が『遠野郷昔噺集』を謄写版刷りで発行している。これらの昔話は夏休みの宿題として生徒たちが集めてきたもので、女子生徒の卒業研究としてとりくまれた。福田八郎も小学校教員として生徒たちの宿題として民話集めをさせて『遠野の民話』（1966年、附馬牛小学校）『1973年1月冬休み民話集』（1973年、土淵小学校）を出している。附馬牛小学校校長、土淵小学校校長をつとめた福田八郎は、退職後、遠野市文化財審議会委員となり、岩手国体前後に遠野民話同好会会長となっている。福田が会長をつとめる民話同好会は『遠野の昔話』を日本放送出版協会から刊行し、全国的な注目をあびることになった⁽¹⁶⁾。石井は、遠野でそれまで使われていなかった「民話」や「語り部」という言葉を導入したのは福田ではないかと次のように推察している⁽¹⁷⁾。

「民話」という言葉は、今では「昔話」「伝説」「世間話」を広く包括する用語として用いられ、何でも入る便利な箱のようになっています。遠野では、この言葉によって、本来はほとんど接点のなかった『遠野物語』と『昔話』の世界が括られてしまったところがありますが、それに深く関わったのが福田さんではなかったかと思われるのです。（中略）

振り返ってみれば、『遠野物語』と『昔話』を二つの柱とする、現在ののような遠野の観光のかたちができあがったのは古く見ても三〇年ほど前であり、本格的になったのは二〇年くらい前からではないかと思います。そうしたシステムを作り上げるために、『民話』や『語り部』という言葉が重い役割を担ってきたことは、何度注意してもいいことだろうと思います。もしそうだとするならば、福田さんは、現在の遠野を作ってゆくうえで非常に大きな役割を果たしたことになります。

福田八郎以外にも宮城県の高校教員で1960年代から宮城・岩手で昔話の採集を続けた佐々木徳夫は、460話を採集・収録した『遠野の昔話』を1985年に刊行している⁽¹⁸⁾。岩手県下の高校教員で県立博物館にも勤務した工藤紘一も、鈴木サツ、正部家ミヤの昔話集を編集している⁽¹⁹⁾。

「民話のふるさと」として遠野が全国的に注目されるようになった頃、1986年に柳田研究者である後藤総一郎が地元の市民、学校教員たちとともに遠野常民大学を創設した。1997年にはその10年に及ぶ共同研究の成果として『注釈遠野物語』⁽²⁰⁾が刊行される。その編集代表を務めた高柳俊郎も中学校社会科教員であり、退職後は常民大学を継承発展させたNPO法人遠野物語研究所の中心となり、現在所長を務めている。またみずから語り手でもある小学校教員佐藤誠輔は、1996年から同研究所主催の語り部教室（昔話教室）を開設し、語り部たちの養成の中心となる。

このように「民話のふるさと遠野」の再発見の背景には、戦後直後から学校教員たちが地域の伝統文化である昔話を語る話者を掘り起こし、採集・記録し、研究を積み重ねるという地道な郷土史研究を行ってきた長い歴史がある。戦前に「遠野教育」と呼ばれた大正自由教育の系譜を継ぐ生活教育の伝統をもつ遠野市⁽²¹⁾において、教員たち自身が伝統文化の発掘・継承者の役割を果たし、「民話のふるさと遠野」の再発見とその価値の共有に大きく寄与したことは教育史上、注目すべきことといえよう。

軍国主義にむかう1930年代に自力更生運動・郷土教育が国家的に推進されたが、その渦中で、戦後の生活教育運動の旗手となる石橋勝治が遠野尋常高等小学校に赴任し「遠野教育」を発展させた。1937年から38年にかけて子どもたちに「自主的・自律的学習」の追求を促し、「子どもたち自身の議決による自治的活動」として生産労働の教育・郷土学習、学級自治会と全校自治会を実現している⁽²²⁾。自由教育を支持する三田憲校長と石橋勝治の在任中に、後に遠野物語研究所の中心メンバーとなる高柳俊郎と佐藤誠輔が遠野小学校の生徒であったことは、決して偶然とはいえないであろう⁽²³⁾。

『注釈遠野物語』の巻頭で、後藤総一郎は、この注釈研究が常民大学に集った教員・市民たちと国文学・民俗学の三浦佑之、赤坂憲雄、石井正己ら専門研究者との「共同学習」の成果であるとして、その意義を次のように述べている⁽²⁴⁾。

在地の研究者が育まれたことの意義は限りなく大きいといえよう。本書と本書を編まれた地元研究者の誕生を契機として、遠野は単なる表層的な

観光「民話の里」から脱出して、日本常民の精神史の象徴的な紙碑としての『遠野物語』の里として位置づけられていくであろうし、またそうあらねばならなくなるであろう。(中略)

願わくば、地元遠野の市民が、広く本書を手になれ、熟読され、遠い先祖の苦悩に満ちた精神史をふりかえり、そこから離陸した今日の生活と精神のありようを改めて見直し、遠野人としての「自己認識」を深めながら、確かな誇りをたちのぼらせてくれることを期待したい。

1995年に常民大学を発展させて市の助成を受けた遠野物語研究所が発足する。研究所は後藤総一郎所長のもと高柳俊郎が所長代理となり、会員制研究組織として市内外の参加者による遠野物語研究を広げるとともに、語り部の養成事業も開始される。

2. 遠野市の地域づくり構想

(1) 「トオノピア」プラン

「民話のふるさと遠野」というイメージは、高度成長期まで遠野市の地域づくりビジョンの中心的な柱にすえられていたわけではない。1960年前後から、農林省の大規模草地造成開発モデル地区の指定を受け、北上山地に大田園都市をつくるという産業政策が推進されていた。戦前から馬の産地として知られていた遠野では酪農を振興し、時代の変化のなかで馬から牛への転換がはかれていった。

1970年の岩手国体を機に「ふるさと」に目を向ける機運が高まり、若手職員のプロジェクチームによる市民センター構想のプロジェクが発足し、1971年に市民センターが開設された。1972年にはカントリーパーク構想とよばれる田園都市構想が承認され、1977年には田園都市・博物公園都市をめざす「遠野市総合計画 基本構想」(トオノピアプラン)に結実していく。

市民センター構想については、法制度的に独自の運用をおこなうことについて職員間で議論がおこなわれた。市民センター条例第2条には「市民センターは市長および市教育委員会の所掌事務の一部を分掌する補助組織、ならびにこれらの分掌にかかわる公の施設の総合体とする」と規定されている。市長部局

と教育委員会の双方の権限を分掌する複合施設であるが、施設機能というより行政の縦割り組織の連携に重点がおかれている。市民センター内部に市民生活部と社会教育部・文化部がおかれ、社会教育、芸術文化、文化財、図書館・博物館、コミュニティづくりなどを一体的に推進するよう行政内部の組織的連携が図られた。

1971年の市民センター開設記念を機に定められた遠野市民憲章は、「わたしたちは、清らかな山河、澄み切った空気のもと、語りつがれてきた民話とゆかしい文化をもつ心のふるさと遠野の市民であることを誇り、このまちをさらに豊かな田園都市にするために、ここにこの憲章を定めます」とうたっている⁽²⁵⁾。市民センターは当時自治省が推進したコミュニティ構想を受けているといわれるが、市民憲章が市民センター運営の理念として制定され地域振興と文化的生活向上を総合的な目標にすえている点で、遠野市独自の地域づくりセンター構想ということができよう⁽²⁶⁾。

カントリーパークは旧遠野町に新設された市民センターを中心に、7つの旧村単位に地域組織・施設として地区センターを置き、「地区公民館、地区体育館、郷土博物館、福祉センター、運動場、学校、ショッピングセンター、農産物集荷センター、農機具センター、診療所など」をまとめて設置し、「市民センターと各地区センターが有機的なつながりを持ち、全体としてあるまじり」をもつよう意図された地域計画のことである⁽²⁷⁾。1974年に土淵小学校に近接して土淵地区センターが完成し、それを拠点に伝承館が建設された。伝承館には国の重要文化財の指定を受けた旧菊池家（曲り家）、『遠野物語』の伝説オシラサマをまつたオシラ堂、昔話の語りのためのいろいろのある部屋、佐々木喜善記念館、習俗を伝える民家や民具が設置された。その後も地区ごとに特色のある施設設置が進められていった。2005年の宮守村合併後には宮守地区センターも設置された。

市民センター・地区センターの設置は、施設設置にとどまらず、地域づくりへの住民参加を促す組織づくりの機能を担った。各地区に地域づくりの連絡協議会が結成され、その動きは以下のように全市に広がった⁽²⁸⁾。

青笹町では、50年1月地区センターに地区公民館長など40近い団体の長

が集まり、各種団体連絡協議会を開催した。また上郷町では同年2月に、青笹町に続いて地域づくり連絡協議会（地連協）による連絡協議会がもたれた。ともに会場では熱の入った議論がつくされ、生活環境の改善に向かっての新たな地域づくり、地域住民による具体的な実践活動の推進、さらに一歩推し進めた市全体の生活環境の整備推進などが提案された。その後、土淵、小友、綾織、附馬牛、松崎、遠野の各地区でも地連協による連絡協議会が相次いでもたれた。

地区センターは、地域づくり連絡協議会と連携してコミュニティづくりのための学習機会の提供をおこない、地域にねざした課題解決と基礎コミュニティ（自治会）の活動充実をはかることをめざしており、必ずしも「民話のふるさと」づくりのみを目標とした地域づくり構想ではなかった⁽²⁹⁾。しかし、＜トオノピアプラン＞は結果として、「民話のふるさと遠野」の名を全国に知らしめる地域づくりを実現したといえよう。

遠野市「総合計画」では、市民センター構想・カントリーパーク構想を土台とする遠野市の将来展望として、生産加工都市、健康文化都市、博物公園都市の三つの都市像の総合調和をめざした永遠の田園都市を模索し、「北上山地の大自然に息吹く永遠の田園都市づくり＜トオノピアプラン＞は、自然的、歴史的、社会的、経済的、人間的総和と循環と調和の相乗効果をもとめ、地域社会の主体性を確保しながら長期展望にたって、総合的、計画的にすすめるものとする」⁽³⁰⁾とうたった。＜トオノピアプラン＞を推進した工藤千蔵市長は、遠野の将来像を「岩手日報」紙上で次のように述べている⁽³¹⁾。

郷土の先人たちは自然と共に生きることを基本に開発を進めてきた。それが正しい市勢発展の在り方だと思うし、私たちもそれを基調に後代にあやまらぬ道標を築いていかななくてはならない。種々の開発計画のなかで市民センターに密着したカントリーパーク構想もスタートした。大自然と調和した地域の人々の一大休養の場である。市制20周年を迎え、これから20年後、30年後の遠野にはそれこそ遠大な夢がある。市民とともにその一つ一つをたいせつに育てていきたい。

1980年には日本初の民俗博物館といわれる遠野市立博物館が図書館との併設で開館した。1983年にはサントリー地域文化賞・最優秀賞を受賞、1984年には土淵地区に伝承園が開館、1986年には市街地中心部にとおの昔話村が設立される。市民センターでは毎年、市民実行委員会による創作市民ミュージカル「遠野物語ファンタジー」が上演され、センターの利用者は年間延べ30万人を超えるという賑わいをみせた。1989年にはJR 遠野駅から城跡の鍋倉公園にいたる徒歩15分ほどの目抜き通りが「民話通り」として整備された。1970年代から80年代にかけて、「民話のふるさと遠野」の地域イメージは市のまちづくりプランとあいまって、市民の文化活動や郷土理解を通じて浸透し、多くの大型観光バスが到来する観光地として発展をみせたのである。

<トオノピアプラン>は、「自立する都市」「新しい都市像」⁽³²⁾をうちだして注目をあびた。日本地域開発センターは遠野市を内発的発展モデルのひとつとしてとらえ、複数の学際的な地域学研究者と遠野市関係者との研究討議を開催している。ここでは「自立」のあり方について、現実的な視点から課題の提起もなされている。たとえば経済学の立場から清成忠男は、遠野市では公共投資が地域に波及して地域乗数効果を高めているプラス面に注目して、次のように指摘している⁽³³⁾。

田園都市というのは、やはり都市圏だろうと考えられる。私はおそらくこれからは、カルチュラルユニットという単位で、経済の域内循環がほぼ完結するように考えるべきだと思うのです。(中略) 孤立してしか成り立たないような産業はやらないほうがいいということです。(中略) やはり一次、二次、三次が地域を単位として横につなげられるような形で仕組んでいく、産業連関効果を考えていかなければならない。

もう一つは、産業が生活を壊さない。むしろ産業が生活の質を高めていく、逆に生活の質の向上が産業の質を高めていくような、生活文化と産業の統合という視点が、もう一つ必要だろうと思うわけです。

清成はこの段階で人口3万数千人規模の遠野市を自立の単位と考えるのではなく、相互に循環しうる広域経済圏としての自立のあり方を提起している。固

有の地域文化をもつ遠野市にとって「生活文化と産業の統合」は容易な問題ではないが、清成が提起した問題はその後の遠野市の地域づくりにおいてより切実な現実的課題となっていく。

（２）「永遠の日本のふるさと」遠野のビジョン

1996年に「トオノピアプラン総合計画 第5次基本計画」が策定され、70年代以降の地域づくりは継続されていく。1996年に附馬牛地区に曲り家を移築して遠野ふるさと村が開園し、市郊外に新たな観光拠点がつくられた。さらに1998年にはバイパス沿いに第三セクターが経営する道の駅「遠野風の丘」がオープンして地元産直店も出店し、年間100万人を超える買い物客が訪れる全国有数の道の駅として賑わいをみせている。

しかし他方で市内では人口減少と高齢化が徐々に進行し、産業構造も変容した。第1次産業の就労人口は1985年には約8000人であったが、90年代末には4400人、2000年代には2000人台となり、約四分の一に減少している。第三次産業を中心に就労者一人あたり純生産は拡大していくが2000年代には横ばい状態となり、就労人口も減少し始める。全国の地方都市と同様、少子高齢化の問題が深刻化し、2000年代末には高齢化率が33%を超えた。2005年に人口約5000人の宮守村を合併するが人口減少の歯止めとはならず、2010年の遠野市の人口は29,331人（平成22年国勢調査）となり、1960年代の3万7千人台をピークに減少が続き、子どもの出生数の減少、若者の流出も進んでいる⁽³⁴⁾。2013年には伝統ある土淵中学校も統合されることになった。

このような産業構造と生活実態の変容に対して、2006年には市の新たな総合計画「遠野スタイルが創造する永遠の日本のふるさと遠野」が策定された。この計画では、従来の「民話のふるさと」のイメージを広げて、グリーン・ツーリズムを中心に産業、雇用の振興と中心市街地活性化をはかる多面的な課題が提起されている。具体的な方向性は以下のように提起されている⁽³⁵⁾。

農業・農村の多面的機能を生かした農業振興を推進するとともに、遠野らしさを追究した観光・交流を商業振興につながる市街地の活性化や地場産業の新たな起業の促進、企業誘致、柔軟な経営感覚を持つ産業の担い手

の育成、若者の雇用推進などを推し進める必要があります。

また、本市では、日本のふるさと再生特区（通称「どぶろく特区」）を機に交流人口が拡大してきており、グリーン・ツーリズム（遠野ツーリズム）を遠野ならではの産業として、より飛躍させることが新市の発展の大きな鍵となっています。

具体的に、遠野市の特性として以下の7つの項目があげられている⁽³⁶⁾。

- ① 四季折々の美しい自然環境
- ② 山・里・城下町のやさしい景観
- ③ 『遠野物語』に代表される昔話の宝庫
- ④ 伝承されてきた数々の郷土芸能
- ⑤ 日本一のホップ・ヤマメ、東北一のワサビ生産と消費量日本一のジンギスカン
- ⑥ 「どぶろく特区」などの個性豊かな遠野ツーリズム
- ⑦ 馬産地・遠野、馬とふれあう「馬の里」

そこから本市の課題として、以下の8つの項目があげられている。

- ① 交流人口の拡大から定住化
- ② 少子高齢化対策と教育環境の整備
- ③ 介護の充実と健康づくり
- ④ 農林業と商工業の活性化
- ⑤ 中心市街地の賑わい創出
- ⑥ 遠野広域経済圏の推進
- ⑦ 生活に身近な環境基盤の整備
- ⑧ 財政の健全化

このような認識をふまえて次の5つの「まちづくりの方向性」がうちだされている。

- ① 快適環境のまちづくりと安全の確保
- ② 安心して暮らせる保健・医療・福祉体制の充実
- ③ 地域資源を活用した産業の活性化
- ④ ふるさとの文化の継承と地域を担う人づくりの推進
- ⑤ 市民と行政の協働

これらを受けて、「前期基本計画」では①自然を愛し共生するまちづくり、②健やかに人が輝くまちづくり、③活力を創意で築くまちづくり、④ふるさとの文化を育むまちづくり、⑤みんなで考え支えあうまちづくりの5つの大綱をかかげ、「遠野スタイルの創造」という基本理念のもと、①地域の特性や資源を生かすこと、②自分たちのまちをよりよくしようと行動すること、③市民が主体性をもつこと、などの市民参加と協働を提唱した⁽³⁷⁾。

以上にみるように2006年の基本構想では、かつての「トオノピアプラン」のような「民話のふるさと」の再発見によって自覚された文化的な地域づくりにとどまらず、70年代以降培ってきた地域資源を総合的に活用しながら交流人口を広げ、観光客のみならずUターン・Iターン者を積極的に受け入れるような生活環境を整備する「ふるさとづくり」に重点がおかれていることがわかる。

経済圏としては花巻、北上から釜石、宮古にいたる広域圏を想定し、通勤圏の拡大や広域物流ネットワークの形成を視野に入れている⁽³⁸⁾。他方で「まちなか賑わい」プロジェクトによって、さびれた中心市街地を商工会、商店街振興会、まちづくり会社などと連携して活性化する方策が打ち出されている⁽³⁹⁾。産業振興部連携交流課は、「で・くらす」遠野プロジェクトを推進している。2000年代の地域づくり構想では、多くの地方都市に共通する過疎化・少子高齢化の実態をふまえながら、独自のテーマとして「遠野らしさ」「遠野スタイル」を追求する課題が据えられたのである。

「遠野らしさ」を実現するために「自然と共生する環境づくり」を大綱にかかげ、自然景観、農村景観、都市景観の領域ごとの景観計画が立案された。「地区ごとの個性的な景観づくりの取り組みによる景観のまちづくりを推進」⁽⁴⁰⁾し、市民と協力しながら美しい景観を次世代に遺す環境保全活動を展開した。2007年には遠野遺産認定条例が制定され、2012年度までに114の遠野文化遺産

が認定されている⁽⁴¹⁾。このような景観保全、歴史的文化的遺産保護の努力によって、2008年には『遠野物語』に描かれた早池峰山周辺の馬産の原風景を伝える荒川高原牧場が国の重要文化的景観に指定された。

さらに2012年には『遠野物語』の民間伝承の中心地である土淵町山口集落が国の重要文化的景観の追加認定を受けた。遠野市文化研究センター・文化課長として景観保全・遠野遺産認定を進めている太田隆宏は、土淵地区センター長として6年間在任中、土淵の地域住民の生活史・民俗の聞き書きに取り組み、住民ぐるみで地域の文化財を保護する活動をおこなって画像をCD化するなど、山口集落の重要文化的景観指定の基盤をつくった。太田は土淵町のことを「不思議なまちです。人々がフレンドリーで、行政と住民が同等の立場で一緒にやろうという住民が大勢いる。市民と一体となった協働のスタンスをつくるには10年ぐらいかかる」と息の長い協働のとりくみの体験を語っている⁽⁴²⁾。

このような長年にわたる地域づくりを積み重ねて「民話のふるさと」から「日本のふるさと」へと視野を広げた市の地域づくりビジョンによって、『遠野物語』を育んだ歴史的自然的環境そのものの価値を後世に伝えていく遠大なとりくみが始まったのである。

「民話のふるさと」の再発見は観光地としての発展を促したが、2000年代に入って市の中心市街地の観光客の入れ込み数は横ばいとなり、道路網の拡充もあいまって「通過型観光」の傾向が強まった⁽⁴³⁾。そこからの脱却をめざして、滞在型グリーン・ツーリズムを模索していた矢先に、東日本大震災が発生した。遠野市は市庁舎の被災、そして何よりも放牧地帯である高原の放射能汚染という困難に直面しながらも、震災直後から市行政、市民あげて三陸海岸沿岸被災地支援をおこない、多くのボランティアが宿泊する岩手県内最大の後方支援拠点となった。沿岸部への唯一の陸路が確保されていた遠野市には全国の市町村や民間団体から支援者と支援物資が到着した。遠野市民が米を持ち寄って握ったおにぎりは15万個に達したという。まごころネットがボランティアを被災地にピストン輸送した大型車両は2011年末に5000台を超えた。遠野市に建設された仮設住宅の住民に対して地域婦人会は年間を通して日常的な支援活動をおこなっている。このような経験は、市民にとって広域生活圏としてのつながりをあらためて実感するきっかけとなったといえるであろう。大震災を契機に行政

と市民とのより緊密な協働が発展し、被災地を励まし支援すること自体が地域づくりやツーリズムのテーマとなりつつある⁽⁴⁴⁾。

たとえば2011年4月に発足した遠野市文化研究センター（所長赤坂憲雄）は、全国から届く図書を被災地に献本する図書館支援活動や文化財レスキューを主要業務のひとつにすえた。遠野物語研究所主催の2012年秋の遠野物語ゼミナールでは、被災地支援ボランティアセンター・まごころネット代表の多田一彦の講義にもとづいて、フィールドワークとして被災地訪問を実施した。まごころネットでは、常時数百名規模で滞在する全国のボランティアのために、語り部の語りの場を設けて交流をはかっている。遠野の地域文化と被災地支援・復興の課題とを結びつけた市民参加が活発になり、遠野を訪れる人々にもそのことが印象づけられるようになった。ふるさとに「住む市民」と「滞在のために訪れる人々」、長期に継続している「被災地支援ボランティア」との心の交流が深まり、いわば非常時にも力を発揮する「遠野スタイル」が創り出されつつある。

大震災の前、2008年から2010年にかけて盛大に催された『遠野物語』百周年記念事業の一環として中心市街地活性化協議会と行政の連携による遠野「語り部」1000人プロジェクトが開始された。人口3万人のまちで、1000人の語り部を養成しようというプロジェクトである⁽⁴⁵⁾。ここでの語り部活動は、昔話だけではなく生業、食、郷土芸能、歴史を含む5つの分野の生活文化の継承をめざしている。「ふるさととの文化の継承と地域を担う人づくり」の方策は、幅広い市民の参加による世代間交流を促す学習文化的なとりくみとして期待されている。プロジェクトの内容については次節で述べたい。

3. 遠野物語研究所と語り部活動の継承

（1）「語り部」の誕生

「語り部」という用語は「古代儀式に際して旧辞・伝説を語ることを職とした品部」（広辞苑）といわれ、重々しい儀式的役割を果たす高貴な存在とされてきた。戦後、1970年以前にはこの用語は新聞紙上にもほとんど登場しないが、1970年代から徐々に広く使われるようになり、1980年代以降には使用頻度が急増してきた⁽⁴⁶⁾。遠野では、鈴木サツが1971年 NHK に放送番組で「語り部」と

して登場し、同年に市民センターのこけら落としでも昔話を語り、語り部の呼称が定着したとされる。語り部という称号については、先述の石井正己の指摘にあるように遠野民話同好会会長の福田八郎がかかわったといわれている。

みずからも昔話を語る遠野物語研究所の佐藤誠輔（元小学校教員）は、語り部という用語が使われるようになった経緯を次のように述べている⁽⁴⁷⁾。

家で語っている方はまぎらわしいので語り手、人前で語る人を尊敬して語り部と言うというのが私の考え方です。語り部は昔話村などの施設ができてからだと思います。大学の先生が入ってきたとき、あそこのおばちゃんが語っているということで求めて聞きに行って、それは1、2人に語って聞かせる語り手ということですね。そういう人が人前にひっぱりだされるんですね。

佐藤誠輔は1928年に遠野で生まれ、父親から日常的に昔話を聞いて育った。佐藤は「私がどうしてこういう世界に入ったか」という点について次のように述懐している⁽⁴⁸⁾。

私は遠野生まれの遠野育ちなんです。父親が建設業をやっていたんですが、その頃子分たちが家に帰ってくるとき、なんて言って入ってくるかという、「そこできつねにだまされたあ」なんて。（笑い）

遠野では突然来る客を「のなし客」（野なし客）っていうんですね。遠野だけだと思いますが、行き場のない人ですね。「漂白きり」って言って、話のうまい人、ほらふきですね。本当の話もあるし、うその話もあります。佐々木喜善のおじいちゃんは佐々木長助という人で、大槌街道の峠で茶屋をやっていてその主人だったんですが、長助ほらっていわれていました。遠野ではほらふきって尊敬されるんですよ。雪の中をさまよって来た人におもしろい話きかせるんですね。私もそんな環境の中で育ちました。

佐藤が育った環境のように、昔話が日常的に家庭や道中の茶屋や宿屋、市場などで語られることは、江戸期から1950年代頃までの遠野ではありふれた光景

であったようである。

宮城県の高校教員佐々木徳夫は、昔話・観光ブームが起きるよりはるか前、1960年から遠野通いを始め、『遠野の昔話』に460話を採集して収録している。当時の遠野には「語り手」と名乗って昔話をしている人はいなかった。佐々木は、採集の体験をふりかえって次のように述べている⁽⁴⁹⁾。

語り手を探す場合、直截的に「昔話を知らないか」ということは言わないです。(中略)その人の表情とか語り口調によって、「ああ、この人は話者じゃないかな」とかね、「10話ぐらい聞けるかな」とか、これは長年の感触でつかめるようになりました。(中略)私は農作業をしている人とか、道端で出会った人とか、あるいはバスや列車の中で乗り合わせた人とかに話しかけて、語り手を探したりもします。座席を渡り歩いて、話しかけるんです。(中略)昔話は子供だましの、取るに足らない話だと思っていますからね。それに語り手は、「おれは幼い頃聞いた昔話を何話が覚えている」と名乗りをあげてくれませんから。名乗ってくだされば助かりますが、そういう人は滅多にいない。(中略)昔話研究は、話者との出会いが第一歩です。「昔話採集家は話者の第一発見者でなければならない。他人が苦労して発掘した話者を訪ねて回るのは、昔話愛好家だ」というのが私の持論です。

佐々木徳夫が関敬吾の資料を参照したところ、宮城県では100話ぐらいの昔話が伝えられているのに対して岩手県では900話にも達しているという⁽⁵⁰⁾。岩手県、そして遠野郷がいかに豊かな昔話の宝庫のような地方であったかということがわかる。佐々木が発見した多数の話者は、鈴木サツや白幡ミヨシ、阿部サダなど、その後全国的に語り部として知られるようになる。

『遠野物語』刊行百周年を記念して、遠野物語研究所の研究員と石井正己によって34人の「遠野の語り部たち」の紹介がおこなわれている⁽⁵¹⁾。ここでもっとも昔の語り部としてあげられているのは、亘石谷江(安政5年・1858～昭和12年・1937)である。『遠野物語』に収録された話を柳田国男に語った佐々木喜善は、同郷の亘石から昔話を採集して『老嫗夜譚』を著している。本書では

辻石の豊かな昔話の世界を次のように描いている⁽⁵²⁾。

谷江は安政5年（1858）の生まれですから、喜善が訪ねた大正12年（1923）には65歳ほどになります。谷江はその辻石を名乗ったお祖母さんから多くの話を聞いて育ちました。「おらの祖母お市という婆様はまだまだおらの三倍も四倍も話を知っていた」と話しています。（中略）『老嫗夜譚』をあらためて読み返してみても、まず感心するのは、文字を知らないお婆さんが、よくもこれまで昔話を覚えていたものだということです。（高柳俊郎）

「語り部」として全国的に知られる鈴木サツ（明治44年・1911～平成8年・1996）は次のように紹介されている⁽⁵³⁾。

昭和46年（1971）、60歳の5月、NHK ラジオの取材で、父力松さんの代わりに昔話を語ることになったのです。この年には、遠野市民センターのこけら落とし（12月）でも「オシタサマ」を語ることになり、サツさんの昔話人生の遅い幕開けとなりました。嫁入りしてから、ほとんど語らなかったという40年余のブランクも、余り感じなかったと言いますから、幼少年期の記憶力のすごさを改めて感じさせられます。（中略）

61年（75歳）の時、小澤俊夫先生のお骨折りで、今まで語ってきた昔話の決定版『鈴木サツ全昔話集』を発行します。この年を挟んで、60年にNHK 東北ふるさと賞、61年に岩手日報文化賞、62年に遠野市教育文化振興財団から市民文化賞、63年には岩手県教育委員会表彰を受けました。その間、サツさんは、東京、大阪、堺、札幌、三鷹、仙台、富田林、四条畷、秋田、九州、仙台、札幌・旭川、大宮などで精力的に語り続けます。そして平成元年（1989）（78歳）には、遠野市から文化功労者として表彰され、平成5年（1993）（82歳）、文部省から地域文化功労者表彰を受賞したのです。いずれも全国に遠野昔話を広めた先達としてのご褒美だったと思われます。（佐藤誠輔）

鈴木サツはまさに1971年という「民話のふるさと遠野」の再発見の時期に、60歳で昔話を語り始め、85歳で死去するまで、全国の人々に遠野の昔話を語り広げた功労者であり、「遠野の昔話」を「声の文化」として現代社会に語り伝えた象徴的な語り部であった。鈴木サツの妹の正部家ミヤ（大正12年・1923～）は52歳から登場し、サツの死後89歳になる現在も語り部として活躍を続けている⁽⁵⁴⁾。その姪にあたる菊池栄子（昭和15年・1940～）はサツ・ミヤの兄の娘で遠野では若手の語り部であり、やはり祖父菊池力松から聞いた昔話を語っている。

第一人者の語り部、あるいは語り部第一号ともいわれる北川ミユキ（明治31年・1989～昭和57年・1982）は、訪れる人々に本来の昔話の語りのように自宅の縁側などで語った。佐々木喜善とは姻戚関係にあたり「遠野郷の昔話の原型を伝承した直系の語り手」と評価されている⁽⁵⁵⁾。阿部ヤエ（昭和9年・1934～）は、「とにかく歌うこと、語ることが大好き」という語り部として知られ、『人を育てる唄』（エイデル研究所、1998）を刊行するなど、「わらべ唄と昔話を一対にして、教えられ、人としての生き方を教わってきた人」⁽⁵⁶⁾であり、各地のわらべ唄の講座で指導者としても活動しているユニークな語り部である。

多くの語り部は、遠野市が設立した伝承園やおの昔話村、ふるさと村などの施設で、大勢の観光客の前で語る。遠野では長い間、昔話がどの家でも日常のありふれた文化であり、その価値が市民に認識されなかったために、こうした施設で語ることに對して「そんなことで銭っこもらって・・・」などと言われることも多かったという。郷土史研究家たちの地道な採集、全国の民俗学や民話研究者の評価によって語り手たちの存在が注目され、口承文化が重要な地域文化として全国的に認められるようになって、ようやく地域の中でも「語り部」が認知されるようになったのである。

佐々木徳夫が述べているように、語り手を「発見」したのは地道に採集を続けた郷土史研究家たちである。柳田の『遠野物語』の中心舞台、土淵の山口集落を2000年代に再訪問した佐々木は「戸数は40戸ほどで、以前、何度も探訪したし、今度も戸ごとに歩いてみたんですが、昔話の断片を知っている人もいませんでした」と述べている⁽⁵⁷⁾。

1960年代から2000年代にいたる50年余は、語り手が発見され、「語り部」が

誕生した時期であった。語り部は家のなかでの日常的な語りを公衆の場における語りへ、いわば「芸能」に高めたプロフェッショナルとしての役割を果たしてきたともいえる。しかし他方では、この時期に遠野地方のみならず全国的に、住民や子どもたちの日常生活のなかで昔話を語り、聞くという民間伝承の習俗はほぼ完全に消え去った。文字化され、CDに録音された昔話は残されたが、「声の文化」として昔話を語り継ぐ活動を21世紀にどう継承するのか。「民話のふるさと」として他の地方に先駆けて語り部の活躍する舞台を広げ、観光振興をはかってきた遠野市の地域づくり政策の今後の展開が注目されるのである。

（２）遠野物語研究所と語り部教室（昔話教室）

遠野物語研究所は、民間組織として『遠野物語』と遠野の昔話の価値を認識し、遠野の歴史文化、民俗を学問的に追究する研究者と、地域の歴史や文化に関心をもつ一般市民が共に学ぶという学習活動を展開してきた。研究所は市の助成を受けて1995年に発足し、2002年にNPO法人の認証を取得している。その定款には、「この法人は、柳田国男の名著『遠野物語』を持つ日本民俗学ゆかりの地遠野市に設立された。遠野市の歴史と民俗の研究調査・資料の収集を行い、民俗文化の情報を全国に発信することによって、市民の文化的基盤の強化に寄与することを目的とする」とある。行政の施策とは異なる、より自由な学術的な関心から学習活動を進め、遠野市民が『遠野物語』をみずからの歴史文化として主体的に受け止める力を培ってきたという点で、研究所の存在意義は大きい。

遠野物語研究所の前史として、先述のように1986年に柳田学の研究者である後藤総一郎が遠野常民大学を創設した。常民大学は年1回開かれ、そのなかで次第に『遠野物語』の注釈研究が中心的な研究活動になっていった。現在遠野物語研究所長を務める高柳俊郎は、『注釈遠野物語』は「結局常民大学の発足の頃から10年かかったんです。常民大学の卒業論文です」と述べている⁽⁵⁸⁾。遠野物語研究所の発足から10年間の活動の展開を高柳俊郎は次のように概括している⁽⁵⁹⁾。

遠野物語研究所のそもそものはじまりは、遠野常民大学を核として、民

間の遠野の学習団体、文化団体を結集して、遠野の学びの場、サロンの集まりを作ろうというのであったわけです。(中略) 遠野常民大学がはじめた遠野物語ゼミナールを継承していくことになりましたし、研究所ができてから、遠野物語教室という中高校生を対象とした勉強会ができましたし、それから語り部教室で、遠野の昔話の勉強会をやってきました。それから遠野学会という1年1回ですけれども、遠野の民間の学習者、文化団体の1年間の歩みを発表しながら、文化的交流をしようというのが、イベントとして行ってきた大きなことだったのです。(中略) けれども最初の目論見に比べて、なかなか人的な面での発展が、予定したほどでなかった。(中略) 後藤先生を目指したものを継承するために大わらわの段階です。

研究所長後藤総一郎の死去によって、研究所の運営は専門研究者の協力を受けつつ高柳俊郎や佐藤誠輔など、退職教員や市民ボランティアの手にゆだねられた。第一線の研究者による講演・講義やフィールドワークをおこなう遠野物語ゼミナールは、遠方からの参加者も多く、常民大学時代に第1回(1994年、3泊4日)が開催されて以降毎年継続されて、2012年度には第19回(1泊2日)を重ねている。『遠野物語』の世界を多角的に読み深め講義録を文庫版で発行するなど、市民参加の研究活動を息長く続けてきた。研究員として名をつらねた赤坂憲雄、三浦佑之、石井正己らの講義に加え、テーマによってそれぞれの分野の専門家が招聘された。後藤総一郎をはじめ多くの研究者たちにとっても、『遠野物語』の世界が尽きない探求の対象であったからこそ、このゼミナールが多数の専門家の参加・協力を得ながら継続してきたといえるであろう。

他方で、研究所発足の翌年1996年に語り部教室(昔話教室)が創設された。前期・後期に分けて各6回(近年は5回)、昔話についての講義とともに遠野の語り部の語りを聞き、受講生も語る体験をもつという試みが始まった。初回の実施要領には「遠野で語られている昔話(以下『遠野の昔話』と略記する)や、近い昔の話(世間話)などに興味を持ち、仲間づくりを通して、話を語り継いでいこうとする人を育てる」⁽⁶⁰⁾と書かれている。自分も語ってみようという市民を養成し、昔話を語る活動を広げることを目的とした教室である。

教室の基本パターンとして金曜午後1時半から3時半まで開かれ、①講話、

②語り部の昔話を聞く、③語り部を囲んで話し合う、④みんなの前で語ってみるというプログラムが考案された。白幡ミヨシ、正部家ミヤ、阿部ヤエ、鈴木ワキ、菊池ヤヨ、菊池栄子など、語り部として活動している人々が講師となって昔話を語った⁽⁶¹⁾。何年も継続的に参加する市民も多く、最初の3～4年間受講を続けた市民の中から任意団体として語り部グループ「いろり火の会」が誕生するという大きな成果がうまれた。

この教室を発案し主催者となった佐藤誠輔は、その考え方について次のように述べている⁽⁶²⁾。

研究所の事業内容が、遠野物語ゼミナールや、出版事業だけに片寄らないように、(語り部教室は)市民向けの公開講座を設けようという発想で、「遠野物語教室」と共に全く内発的なものである。

一つのきっかけは、遠野市が毎年行ってきた「昔話祭り」ととおの昔話村「語り部ホール」による語り部の活動にある。また平成4年の「世界民話博覧会」において国内外の語り部や研究者からじかに受けた文化的刺激も大きい。博覧会の中では、宝物のように扱われている「語り部」の地位が、地元の遠野では意外に低いことにもびっくりした。いずれそれらを念頭に原案を練ったのは、行政(当時文化課長木下隆輔佐)と民間会社(アドホック谷口徹太郎支配人)、そして研究所(佐藤)の三者ということになる。

佐藤誠輔はみずからも昔話の語り手であり、『遠野物語』を研究し理解することにとどまらず、昔話を「語り継ぐ」こと自体の重要性を当初から自覚していたと思われる。語り部教室の事業を「われわれが始めた」「内発的」なものであると強調している⁽⁶³⁾。佐藤はインタビューのなかで、さらにその思いを率直に語っている⁽⁶⁴⁾。

遠野では昔話はたてに続いてきました。じいちゃん、ばあちゃんから伝わってきた。それを横に広げよう、第一線を退いた人たちを集めて、その人たちはほとんど遠野の話を知っていますから、その人たちを横にひろげ

ることを考えたんです。昔話の入り口は知っているけど中や結末を忘れたとか、中は覚えているけど入り口としまいは覚えていないとか。それをひとつにつなげてあげますよ、ということで昔話の好きな人が集まってきました。（中略）昔話教室は去年（2011年）から文化研究センターと一緒にやることになりました。できればずっと続けていきたいですね。興味のある人は釜石、花巻、盛岡からも来るんです。そして地元で釜石や花巻の語りをする参考にするんです。花巻では昔話だけではなく、宮沢賢治の話を入れたりして語っているようです。大事なことは、おれたちじいさま、ばあさまから聞いたことが値打ちがあるんだなって再発見することなんです。

佐藤のこだわる「内発的」とは、「じいさま、ばあさまから聞いたことが値打ちがあるんだな」ということを市民・生活者の感覚で「再発見」することを意味していると考えられる。1970年代から行政が進めてきた「民話のふるさと」づくりは行政のレベルにおける民話の「再発見」であり、一般市民の生活感覚にまではなかなか定着していかなかった。常民大学から遠野物語研究所のゼミナールでは、研究者と市民による『遠野物語』の深い理解にむけた共同研究がおこなわれたが、やはり研究的関心をもつ市民に限定されがちである。これに対して語り部教室は、子どもの頃から習俗として耳になじんでいた生活文化の体験を互いに交流し、共に学び合う、市民同士の相互学習であり、生活文化の価値の気づきと共有・継承を促してきたといえるであろう。

また周辺の盛岡、花巻や釜石など他地域からも教室に参加する市民がおり、観光地ではない地域での昔話の会の活動との交流が生まれていることも重要である。観光客の前で語り、著名になった語り部のあり方を今一度自分たちの日常生活の中でとらえ直し、自分も語ってみようという内発性をひきだしている。結局、先述の研究所のリストで紹介されている遠野の語り部34人のなかで、語り部教室の受講生として学び、いろり火の会メンバーとなった語り部は15人を占めている⁽⁶⁵⁾。

佐藤誠輔は、語り部教室で行ってきたことを次のようにまとめている⁽⁶⁶⁾。

ここ13年間、語り部教室（昔話教室）で行ってきたことは、以下の三つです。

- ① 先輩語り部のお話を数多く聞こう（聞く）
- ② 昔話は遠野の文化遺産であることを知ろう（知る）
- ③ 自分もみんなの前で語ってみよう（語る）

「聞き上手は語り上手です」

鈴木サツさんから言われた言葉です。多くの優れた語り部の多彩な話を、生で聞けたのは幸いでした。特に先輩語り部の体験談を聞けたのは、後々大変な役に立ちました。（中略）語りは、語り手と聞き手があって初めて成り立ちます。昔話を続けるために、新しい時代の語り部は、相手のお話聞く双方向の姿勢を意識してもらいたいと思っています。

「先輩」語り部を受け継ぐ「後輩」の育成は、地域で昔話を語り継いでいくうえで必須である。「語りは、語り手と聞き手がいて初めて成り立つ」という双方向の対話空間を重んじる語りの基本姿勢が強調されていることも、みずから語り手である佐藤誠輔の思いの表れであろう。語り部教室15年の歩みをつうじて「新しい時代の語り部」たちが誕生することになった。

（3）語り部の会「いろり火の会」の発足

いろり火の会の発足について、石井正己は「民俗学者たちは昔話の記録には熱心でしたが、その継承には実に冷淡でした。むしろ、継承は研究の妨げになると考えていたにちがいありません。しかし、その教室には昔話に関心を持つ女性が集まり、熱心な学びを重ねました。やがて参加者の中から有志が集まって、教室での学びを実践しようと考えたのが『いろり火の会』の人々でした」と述べている⁽⁶⁷⁾。

民俗学者たちは口承文芸としての昔話に注目してきたが、実際にフィールドに入って昔話の採集をおこなった郷土史研究家たちにとって「話者」「語り手」は宝のような存在であった。他方で、一般市民の間で長い間その価値が認識されず、その間に日常の子育て文化として昔話を語るという習俗が衰退したことがより大きな問題であったと考えられる。たとえば正部家ミヤのように遠野を

364 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

代表する著名な語り部ですら、子育ての時期に自分の子どもには全く昔話を語っておらず、52歳で初めて東京高島屋で姉の鈴木サツと共に語ったことがきっかけとなって「語り部」として登場するようになるのである。正部家ミヤは1950年代半ば頃「母と女教師の会」の岩手県代表として全国大会にでかけるほどPTA活動などにも熱心であったが、「自分の子どもには昔話を聞かせたことはないです。語ることは考えたこともしゃべったこともないですね」と述べている⁽⁶⁸⁾。

200余りも昔話を記憶しており、長いブランクがあるにもかかわらず50代になって泉のように昔話を語り出し、現在も活躍している正部家自身が、子育て文化としてみずからのもつ豊かな文化的世界について全く認識していなかったことがわかる。都会では多くの昔話・おとぎ話集が刊行され、絵本を子どもたちに読み聞かせする文化活動が広がっていくが、遠野では、子育て文化としての昔話の価値は完全に忘れ去られていった。こうしたことがなぜ生じたのかという問題については別の機会に検証すべき課題である。高柳俊郎が中学校教員の現役時代に、『遠野物語』を学校でほとんど教えたことはなかったと次のように語っていることは示唆的である⁽⁶⁹⁾。

土淵中学校時代は昭和35年から5年間ですから、当時文部省の学力テストが盛んで、土淵中学は『遠野物語』の本場ですが、教室の勉強の方が大事でした。それにその頃学校が火事で焼けて体育館で授業をやっていましたから、どうやって落ち着いた環境にするかということで、『遠野物語』に目をむける余裕はありませんでした。当時就職する生徒は金の卵で、半数以上が工業地帯に出て行く時代ですから・・・。(中略)それに山口、田尻などの直接『遠野物語』に関係する集落の子どもがいますから、なまなましくて『遠野物語』と結びつけた話などはできませんでした。(中略)その頃の土淵の子どもたちは、勉強が好きでない子どもが多かったので、どうしたら勉強を好きにさせられるかといったことが問題でした。

高柳の1960年代前半の体験から、一方で学力向上のためのテスト主義が文部省の政策としておろされてきたこと、他方で「事実譚」として集落の生活の現

実を反映した暗さをもつ『遠野物語』の世界を語ることがはばかれた当時の様子をかいまみることができる。遠野の豊かな昔話の世界のなかで育った世代にとっても、高度成長期に子育て環境は一変し、子どもたちが学力を身につけて都会に出て行って働くことを後押しするような教育観に適応せざるをえなかったという時代状況が浮かび上がってくる。

このような生活変容の中で高度成長期以降に子ども期を過ぎた世代には昔話はほとんどなじみがなく、結果的には子どもの頃昔話を聞いて耳に覚えている60代以上の退職した世代の人々が1996年に開設された語り部教室に集まってきた。なかには男性の受講生もいる⁽⁷⁰⁾。のちにいろり火の会の会長となる工藤さのみは1944年生まれで、いろり火の会メンバーの中では最年少者である。附馬牛村の農家に生まれ昔話を聞いて育ったが、やはり自分の子どもには昔話を語っていないという。昔話を語るようになり、教室に参加した経緯について工藤は次のように述べている⁽⁷¹⁾。

小さい頃、母とか母方の祖父から昔話を聞いていました。でも40代半ばまで、人に話すことは考えたこともありません。娘が生まれても私はほとんど語っていません。何の語りということも忘れていました。(中略)

実は私、バスに乗ってたんですよ。(観光ガイドの仕事に従事する：筆者注)結婚で一時期休んでいたんですけど、カムバックした時にカラオケ、ビデオの時代だったんですよ。でもそういうのじゃなくて何か自分の力でお客様に楽しんでいただけるのがいいのではないかと想着、昔話があったな想着、お客様と相談しながらぼつりぼつり昔話を語り出したというのがきっかけなんです。(中略)

平成8年に佐藤誠輔先生とアドホックが共同して昔話の語り部教室を始めたんです。私、昔聞いた話って、点でしか覚えていなかったのが多かったんです。それで話を線につなげて確立したい想着教室に入ったんです。年に10回とか15回とか、先輩の話とか仲間の話聞いて、時には自分たちも語って……。4年間勉強しました。受講生が60人ぐらい来ていましたね。耳に聞き覚えのある人たちですから4年も人の話を聞くとある程度確立してきて、そこで私より12歳上の方が、おらたちも語る場がほしいな

あ、ってばそつと言ったんです。

「先輩」語り部たちが40年近いブランクの後、泉のように語り出したのとは異なり、工藤たち「後輩」世代にとっては、語り部教室で学ぶことが記憶を蘇らせる上でどうしても必要であった。教室を主催した佐藤誠輔が次のように述べていることは、「先輩」と「後輩」の違いを際立たせている⁽⁷²⁾。

語り部教室の最大の特色は、なんと言っても、最後の三〇分間の実技にあった。「みんなの前で語ってみる」という体験は、受講生には大変な抵抗であったようだ。話の筋をどんなに理解し、暗記したつもりでも、みんなの前に立つと頭が真っ白になり、立ち往生することもしばしばだった。しかし、こんな苦勞を乗り越えた人々だけが、新しい語り部として現在につながっている。

語り部教室はたてにつながってきた昔話の口承を「横にひろげ」、断片的な記憶をもつ人々にまで語り部の層を広げ、厚くするうえで重要な役割を果たしてきたことがわかる。

「新しい時代の語り部」集団として、いろり火の会は「先輩」語り部にはみられないさまざまな試みを行っている。まずは語る場を自分たちの手で確保する必要があった。工藤は観光バスガイドのかたわら商工会女性部のメンバーでもあり、遠野市商工会や行政にも人脈をもっていたため、さっそく商工会のTMOの空き店舗対策に注目し、駅前の空き店舗スペースを借りて語りの場を開設した。4年間共に受講した12人の仲間で2000年2月から1ヶ月半余り、毎日ボランティアとして観光客が立ち寄れば昔話をするという活動を始めた。初日からお客様ノートをつくり、その反響を記録して2000年4月から本格的な活動を開始するための条件作りをした。毎日駅前にボランティアとしてつめるという活動の継続のために、4年間受講したメンバーだけでは手が回らないということで、3年間受講したメンバーも含めて22名で会を発足させたが、家庭の事情等で結局いろり火の会は休会者もふくめて会員数は13人、12年目となる2012年に実際に活動している会員は11人である⁽⁷³⁾。

「先輩」語り部が施設から依頼されて個々の契約によって有償で語っているのに対して、いろり火の会は無償のボランティアとして語るという活動から出発し、新しい語り部グループのあり方を自分たちの考え方によって追求してきた。会員が足並みをそろえて協力して活動すること自体、今までの「先輩」語り部たちにはなかった体験である。工藤がインタビューで述べたことの中から、いろり火の会の活動の特徴をいくつかあげてみたい⁽⁷⁴⁾。

第一に、観光客がぶらりと立ち寄り駅前のスペースに毎日順番に当番がつめていて、常時語りをおこなうということである。この活動は完全なボランティア活動である。

お客さんが一人でもあれば語るという覚悟でやりました。自分たちで語る場がほしかったんです。遠野ではそれまで会がなくて、一人語り部活動です。施設で20分という時間が決められていて2話とか3話を話す形ですから、語り部さんありきで、お客さんありきではないんです。昔話をお金に換算することに私はどうしても違和感があったんですよ。それで無料で昔話を提供する語りの場をつくったんです。

第二に、第三セクターで設立されたホテルあえりあ内部の語り部ホールで毎日夕方語る活動をおこなう契約を結び、また会として県内外の語りの場や団体に会員を派遣すること、さらに2007年からは遠野市内の小中学校に入って、子どもたちに語るという活動を始めた。

いろり火の会は駅前で365日、毎日ボランティアでやっています。あとは年間契約でホテルあえりあで語り、県内外にも派遣しています。学校も遠野の小中学校全部に入っています。もう5年になります。(中略) これも私から頼んで教育委員会に働きかけて学校の子どもたちに後継者になってほしいと3年ほど話したんですが、なかなか門をあけてもらえずで……。それで市長に話して市長を通じて入れるようになりました。1・2年生、3・4年生、5・6年生と学校ごとに3、4回。なかにはもっと来てくださって、5、6回入ることもあります。

第三に、2011年の大震災以後、まごころネットから依頼されて、全国から被災地支援にやってくる300人～400人のボランティアに対して体育館、公民館、プレハブ施設などの宿泊所で夕食後、あるいは雨の日に昔話を語るボランティア活動をおこなってきた。その回数は10ヶ月で70回を超えた。

被災地支援のボランティアの後方ボランティアということで、全国から来て遠野に滞在しているボランティアの方々に語るという活動があります。静岡県、日本財団、シャンティ、神戸、岡山、神奈川などの諸団体から来ている方々で、ボランティアに来て帰るときには昔話を聞いて帰る。被災地で疲れた気持ちを癒して帰りたいということになって、4月の半ばから語り部を派遣して70回を超えました。(中略) ボランティアさんたちは被災地に行って心痛めて、心身ともにくたくたに疲れて帰ってきて、それで言葉の文化ということで聞いてくれて、感謝という言葉をいっぱいいただいています。すごいんですよ。一条乱れずものすごい集中力で聞いてくれる、聞く姿勢が身動き一つしないで、昔話をきちんととらえていることをびしびし感じるんです。(中略) 地元に戻られて遠野の昔話を聞いてきたと話して、じゃあオラも行くという人がいたり、また1回聞いた話が忘れられないから、また聞きたいと言って来てくれるリピーターの方もいます。若い人、学生さんが多いんです。もちろん年配の方もいますが・・・。(中略)

私たちもおにぎり作ったり洗濯ぐらいしかお手伝いができなかったのが、昔話を聞いてもらえて、ボランティアに来てくれた人にボランティアで昔話を語れて、後方支援をやれて本当に良かったと思ってます。「話聞きたくてまた来たよ」って駅前に来て声をかけてくれたり、日本財団から来た台湾の学生さんが私に「遠野のお母さん」って言ってくれたり、家族ぐるみの人のつながりができて、感謝しながら人とのつながりを大事にしないで、って大きく教えられて、つらいことだけど本当に人と人とのつながりって大事だって感じて、少しでも昔話がお役に立てば・・・この活動はこれからも続けていきます。

福島県でも伊達市梁川町の「ざっと昔の会」（会長横山幸子）が県の依頼を受けて全県的に仮設住宅で昔話を語っている⁽⁷⁵⁾。釜石の漁り火の会（会長須知ナヨ）も仮設住宅への訪問ボランティアとして語りをおこない、また外部からの支援者に津波被害を伝える活動もおこなっている⁽⁷⁶⁾。東北あるいは全国の昔話の会の多くが日常的に子どもたちやお年寄りに対するボランティアとして昔話を語っている。遠野では観光施設との有償契約で語る「語り部」が確立されていたが、いろり火の会はその枠を超えて口承活動の原点に立ち返り、まずボランティアとして動き出したのである。このことは1970年代以来の遠野の語り部活動の歴史の中で、明らかに新しい地平を創り出している。語り部教室の受講生という「学習者」の立場からの出発が、新たな発想やエネルギーを生み出したともいえるであろう。

いろり火の会の活動は開拓的で非常に精力的であるが、他県の昔話の会に比べて人数は決して多くはない。「むしろ遠野は遅れている」と工藤は感じており、これからについての抱負を語る⁽⁷⁷⁾。

この時期を迎えて、やはり個人語りではどうにもならないこと、小さい組織でも会をつくってよかったと思うんですね。日本全国どこに行っても、なんとこの会に入っているんですかって聞かれたんです。遠野に会がないということは恥ずかしいと思ったんです、一人語りでてんでんばらばらで統一されたことがないと・・・。会がなければ継承ということにもならないって。なまいきかもしれないけれどもそう思って会をつくったんです。（中略）

語りが幼い頃の生活体験で耳に残っている人と会を一つにして次につないでいくのをどうやっていくのか、よくわかっていません。今（遠野「語り部」1000人プロジェクトで）認定をもらって語っている人は大体同じ世代ですから、その次の40～50代になるとどうやっていくのか、そこのところはこれから考えていきたいです。

いろり火の会は2012年9月に遠野市市政振興功労賞を受賞した。会としての12年間の活動実績が市の側にも認められたということである。同時にそれを再出発の起点として、遠野の昔話を語る活動を次の世代にどう継承していくかと

いう課題に直面している。

遠野の場合、「子ども時代に昔話を聞いた」「耳に覚えがある」「遠野弁で語る」という語り手の分厚い存在が語り部の誕生につながっている。しかしそういう語り部はすでに70代～90代になりつつある。他方では遠野のような特別の伝統をもたない地域で、若い保育士や学童保育指導員、学校教員や一般の民話愛好者の間で昔話の会が数多く生まれ、勉強会を開き、グループで遠野を訪問し、いろり火の会とも交流をおこなっている。子育て文化として楽しみながら昔話を語っている他地域の会の広がり、伝統的な語り部が確立していた遠野市にとっても、語り部活動のあり方をとらえ直すひとつのきっかけともなっている。いろり火の会は伝統にねざして形成された「格式」にとらわれない活動を創り出すことで、「新しい時代の語り部」集団として次世代への橋渡しの役割を模索しているといえよう。

いろり火の会のみならず遠野の地域文化を継承してきたすべての関係者にとって、90年代から2000年代にかけてのとりくみは、新たな視点による次世代への継承の可能性をさまざまに生み出してきた。「語り部」1000人プロジェクトへの広がりもそのひとつとして注目される。

（４）遠野「語り部」1000人プロジェクトの推進

2006年に遠野まちなか賑わい創出プロジェクトチームが母体となり、商工会や観光協会などが参加して中心市街地活性化協議会が発足し、ハード事業に合わせてソフト事業として遠野「語り部」1000人プロジェクトを策定した。この事業が2009年3月に「町家の心が息づく語らいのまち」というキャッチフレーズによる中心市街地活性化基本計画として内閣府の「地方の元気再生事業」に選定され、1000人語り部の養成と認定が開始された。このプロジェクトの目的は次のようにうたわれている⁽⁷⁸⁾。

遠野市の商工会や観光協会などでつくる遠野市中心市街地活性化協議会では、『遠野物語』にある「遠野の城下は則ち煙花の街なり」や「馬千匹、人千人の賑はしさ」を100年後の現代に復活させようと、遠野「語り部」1000人プロジェクト構想を立ち上げました。

民俗学者の谷川健一氏は、「昔の庶民は文字を持たず、口から口へ語り伝えてきた。神祭りの唄も然り、民謡もそうです。年中行事も親代々からの伝承です。今に生きている伝承、つまりは“口碑”とっていい。それが『遠野物語』の大きな特徴です」と述べています。

「1000人プロジェクト」の考え方もその延長上にあり、遠野の多様な文化を伝える「語り部」として、昔話・歴史・食・郷土芸能・生業の五つのジャンルで、文化の継承者として活躍する人材を育成しようというものです。さらには、その「語り部」を生かした観光商品を開発し、交流人口を拡大していこうという目的があります。

語り部の養成と認定の仕組みは比較的シンプルで、「語り部放送大学」（遠野テレビ）で分野ごとに放送番組を放映し、「スクーリング」「認定委員による審査」「認定委員会による認定」という流れになっている。認定委員は各分野ごとに伝承活動の実績をもつ市民と市の職員、識見をもつ市民など3人ずつで構成され、申請した個々人の語り部認定にあたる。2000年の第1回認定で289人が認定され、2012年第4回認定までに531人の「語り部」が誕生している。内訳は、昔話（成人38人、子ども191人）、歴史（94人）、食（70人）、郷土芸能（63人）、生業（74人）、特別サポーター（1人）である。市の所管課は2011年に新設された遠野市文化研究センター・調査研究課で、認定事業の遂行と連絡調整の実務、語り部スポットの開設などのサポートをおこなっている。

「語り部」1000人プロジェクトのもっとも注目される点は、語り部活動を5つの分野に広げて、人々の「語り」「交流する」力によってまちなかに賑わいを生み出そうとする商会的な発想が中心にすえられていることであろう。たとえば商家で2月から3月に雛を飾り、雛の由緒や商家の歴史を語ることで観光客との交流を広げ、あたたかみのあるもてなしとコミュニケーションを生み出すという実践が15年前からとりくまれてきた。商家の店先など展示場所は68ヶ所に及ぶ。歴史や食、生業などの語り部認定では、商店、民宿や食事処を経営する市民が、遠野の民俗、生活文化をあらためて学び、生業や市民活動に生かしながら地域認識として語り継ぐという意識が喚起されている。食の分野では、地域婦人会が郷土食の伝承に力を入れて、多くの認定者を出している。

商家のおかみさんたちが連帯感をもって伝統行事に協力するなどのきっかけづくりにもなっている。郷土芸能も今までそれぞれの地区で伝承されてきており、その歴史や芸能としての特色を、さらにきちんと意識化するというねらいがある。認定という仕組みによって、生活文化を伝承してきた先輩市民と自発的な関心をもつ中堅・若手市民が出会い、あらためて遠野に伝承されてきた生活文化の価値を地域レベルで認識し、まちづくりとして発信していくことにつながっていく可能性がある。

他方で、昔話の語り部認定については疑問も出されている。ここでは成人の場合三話、子ども語り部については一話を語ることができれば認定するというルールで、多数の子ども語り部が誕生している。『遠野物語』百周年事業の催しで多くの子どもたちが舞台上で昔話を語るという機会がつくられ、学校が力を入れて指導する「ふるさと教育」が盛んになった。子ども語り部に認定されることで遠野の地域文化に関心をもつきっかけとなり、さらに深く知りたいという芽を伸ばし、家庭での親子や祖父母との対話ともなることが期待される。他方で一過性のとりくみ、イベントへの動員で終わるのではないかという危惧の念もたれている。ていねいな教育実践としての「遠野の昔話」の教材活用、学校と地域が連携した地域学習、あるいは他の地域のように学校外施設で昔話を楽しみ、好きな子どもが何度も通ってくるような環境づくりなど、子どもの主体性を伸ばす教育・文化としての広がりを見込めるというところが課題であろう。

また成人の語り部については、遠野の語り部活動が分厚い伝統と遠野の文化を象徴するような格式をもつため、簡単に語り部として認定することによいかという疑問をもつ市民も少なくない。昔話が価値のある文化財として住民に認知されるまでに長いプロセスが必要であったことをふまえると、遠野の「語り部」の存在には特別の重みがある。しかし他方では、昔話を楽しみ、子育てボランティアなど、遠野にはあまり根づいていない多様な語りの活動のあり方、広がりも期待されているといえよう。

このプロジェクトは、数十年にわたって尊敬をこめて使われてきた「語り部」という特別の存在を、短時間の講習と認定を通じて大衆化する方法ともいえる。市と商工関係者の協働による地域活性化事業が、人々の生活の営みとして

の文化の伝承をさらに促すのか、あるいは単に観光振興のためのキャンペーンにとどまるのか、とりくみの方法や市民への浸透のあり方について今後の展開を見守る必要がある。そこでは「観光・イベント」と「学習・文化の継承と創造」という二つの次元がどのように相互に関連していくかが問われるであろう。「認定」された語り部たちが、みずからの主体性を育む文化運動として継続的に伝承と創造に関わっていくような環境の醸成と相互の意識向上が期待される。

むすび 今後の研究課題にむけて

遠野市は全国の民俗学・文学・歴史学研究者から注目され、出版物も数多く刊行されている。しかし、市民の学習文化活動と地域づくりの展開を社会教育学の視点から考察の対象とした研究はほとんどなされていない。本稿では、豊かな伝統文化と人々の密度の濃い結びつきのなかで学習文化活動が成熟し、市民が地域文化の担い手として自己形成をとげてきた過程を概観することができた。しかし、研究は緒についたばかりである。

3万人という人口規模が3倍にも思えるほどに遠野市民の地域参加は活発で、伝統文化の継承と市民生活・地域づくりとの関わりは深い。しかし生活に身近であるだけに、市民にとって昔話を語り伝える活動の意義は意識化されにくかった。子育て文化としての昔話の伝承は衰退し、学校教育においても、1960年代以降の学力向上・テスト主義の指導が村の伝統文化である昔話を軽んじる傾向を生んだことは、教育と地域文化の関係を考えていく上で重要な問題である。「ヒトが人になる」習俗としての昔話の口承が、経済活動としての観光振興のみに依存する文化であるとすれば、それはもはや伝統文化とはいえないであろう。

地域文化の世代間継承という点では、1970年代に始まる「先輩」語り部活動から1990年代後半以降の「新しい時代の語り部」への継承過程でいくつかの論点が明らかになっている。「後輩」世代、あるいは、より若い世代が昔話や伝統文化を継承していくためには、その価値に気づき、共に「学習」し、主体的に地域文化の創造を担うような「人づくり」が重要性を増している。同時に、伝統や格式の枠にとらわれない開拓的精神、あるいは個々人の生涯学習やボラ

374 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

ンティア活動といった「先輩」にはない新たな市民活動の感覚など、新しい時代にふさわしい活動の創出に注目する必要がある。

今後の研究ではすでに実施したインタビューをもとに、このような地域文化の継承を可能にする「人づくり」として、学校・社会教育・地域づくり実践における学習・文化の担い手形成の過程に立ち入った分析をおこなう必要があると考える。以下にいくつかの課題をあげておきたい。

第一に、昔話の文芸的意義、文化財としての意義に加えて、市民自身が昔話を口承によって語り継ぐ行為自体の意義をどうとらえるかという問題である。

工藤さのみは、子育ての後40代半ばでガイドの仕事にカムバックした時に各地の町並みや文化財をみて、遠野には「言葉の文化のすばらしさ」があるということをお教えされたと述べている⁽⁷⁹⁾。昔話の語り部・語り手たちは、誰もが文字を読み、書き、メディアの情報に日常的に接する社会で生活しながら、そのなかであって語ることが文字文化とは異なる人と人をつなぐ力になる、あるいは文字化されていない生活世界の庶民の生き様を語り伝えようとしている。語り手はどのように「語る」という言葉の文化に出会い、どのような意味をそこに見いだして活動しているのか。聞く人はそこに何を求めているのか。他の地域の昔話の会がおこなっているボランティア活動や大震災を語り継ぐ活動などを含めて、昔話の口承活動がどのような文化的・人間形成的な意義をもつのかという点を掘り下げていくことが本研究の中心的な課題である。

第二に、昔話の口承という伝統文化の継承活動をつうじて、地域学習への広がりが生まれていくプロセスを明らかにする必要がある。

昔話は、恐らくどの地方においてもそれ自体が地域学としての内容をもっているといえよう。特に遠野では柳田国男『遠野物語』によって構築された地域認識が、民俗学・国文学・文化人類学などの研究を通じて無限の広がりをもたらしている。むろん、すべての語り部・語り手たちがその世界の広がりや奥深さを十分に認識しているとはいえないかもしれないが、郷土の歴史や人々の生活慣習、郷土の人々の人情などについて生活経験をふまえた理解をもちながら昔話を語っていることは間違いない。いろり火の会のメンバーの場合は、語り部教室で昔話についての講義や先輩語り部との体験交流の機会を持っており、遠野物語研究所のゼミナールや遠野物語教室でもフィールドワークや地域散歩

などが取り入れられていることの意義は大きい。昔話を地域文化として継承し、地域の記憶を共有しながら語り伝える共同学習という側面から、伝統文化の継承と地域学習への展開を掘り下げていきたい。そのことがすなわち新たな時代の地域文化創造につながるであろう。

第三に、昔話の口承活動を通じて「交流」と「協働」という社会関係が発展し、共同体に積極的に関与しようとする意識が醸成される過程について明らかにしたい。地域学習における地域の担い手形成という人づくりのあり方、方法について掘り下げる必要がある。

遠野市の基本構想「永遠の日本のふるさと遠野」では、「交流」と「協働」はキーワードとされており、プロジェクトごとに行政と市民団体が協力する態勢づくりが強調されている。その限りでは多くの自治体のビジョンでも共通する方針が掲げられている。しかし遠野では、そのことが生活次元でより深い内発的な意味をもっており、人と人とのつながり、関係性のなかで個々人が社会に参加し、人々が協力しあい、よりよい社会に向けて役割を発揮する、あるいはそれにむけて共に成長していくというプロセスが積み重ねられている。その歴史的な積み重ねの上に「交流」と「協働」が市民活動自体にも生かされていることに注目する必要がある。

たとえばいりり火の会の場合、みずから日常的な語りの場を創り出し、学校に出かけて行って子どもたちに語り、震災ボランティアに対しても語りの機会を持つなど、語り部集団として創造的に活動範囲を広げている。さらには、他地域の昔話の会とも全国的なネットワークをもっており、相互の交流も活発である。こうしたさまざまな関わりのなかで、語り部活動の生き甲斐、やりがいを見いだしていると思われる。

あるいは社会教育行政の大きな行事となっている市民創作ミュージカル「遠野物語ファンタジー」では、毎年500人近い子ども・大人の参加によって地域ごとに伝わる遠野の昔話を題材にとりあげる協同創作・上演活動を35年間継続している。学校の音楽部の子どもたちや旧村・地域ごとの郷土芸能保存会などは毎年舞台に登場しており、地域・学校あげての表現活動が創造されている。舞台を観る市民もふくめて、生活文化を高める交流と協働の場になっている。

さらに遠野「語り部」1000人プロジェクトも、商店会や観光協会が連携・協

働しながらまちづくりを推進してきた延長上で発想されている。「交流」や「協働」は、このような市民間の連携、生活的文化的次元にねざした協力を基盤として初めて力を発揮するといえよう。

21世紀に入ってグローバル社会化が加速している現在、1970年代に提起された「地域の内発的发展」をあらためてどのような新たなモデルとしてとらえることができるのか。イタリアのサレルノ市をはじめ、国内外の地域と交流をもつ遠野市において、地域文化の継承を通じて人々の地域参加を促してきた実践の過程に立ち入って、「交流」と「協働」の地域づくりについて考察を深めていきたい。

(了)

<謝辞>

本稿の作成に際して、いろり火の会会長の工藤さのみ氏には市内の語り部の方々ととどまらず、全国各地の昔話の会をご紹介いただき、出会いの機会をつくっていただいた。遠野市文化研究センター・文化課長太田隆宏氏、博物館主任兼学芸員の長谷川浩氏にも多くの方々をご紹介いただいた。市の関係部局職員、社会福祉協議会の佐藤正市氏、まごころネットの多田一彦氏には、それぞれの事業についての確なご説明をいただいた。遠野物語研究所の所長高柳俊郎氏、研究員の佐藤誠輔氏、工藤さのみ氏にはそれぞれのインタビュー原稿のチェックをしていただいた。8ヶ月間に市内外で50人にも及ぶインタビューを実施することができたのも、これらの方々のご支援の賜である。快く調査にご協力くださり、インタビューに応じてくださったすべての皆様に心から御礼を申し上げる。なお本文中、敬称は省略させていただいた。

[注]

- (1) 佐藤一子「地域再生にむけたソーシャル・キャピタルの継承と地域学習の展開過程—埼玉県深谷市の事例研究を中心に—」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第9号、2012年3月。
- (2) 同、pp.467, 471.
- (3) 同、p.471.
- (4) 鈴木敏正『「地域をつくる学び」への道—転換期に聴くポリフォニー』北

樹出版、2000年。

- (5) 日本社会教育学会編『＜ローカルな知＞の可能性 もうひとつの生涯学習を求めて』（日本の社会教育 第52集）東洋館出版社、2008年。
- (6) 前平泰志「序 ＜ローカルな知＞の可能性」、同、pp.10-11.
- (7) 廣瀬隆人「ローカルな知としての地域学」、同、p.44.
- (8) 佐藤誠輔「語り部の育成」石井正己・遠野物語研究所編『遠野物語と21世紀—近代日本への挑戦』三弥井書店、2009年、p.206.
- (9) 大田堯『教育とは何か』岩波書店、1990年。
- (10) 北田耕也『大衆文化を超えて—民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986年。
- (11) W. J. オング（桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳）『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991年。
- (12) 山形県ふるさと塾推進協議会「山形ふるさと塾だより」参照。山形県教育庁生涯学習振興課の聞き取り調査（2012年8月17日、於山形県教育庁、聞き手 佐藤一子）。
- (13) 宮城県山元町「やまもと民話の会」は『小さな町を呑みこんだ巨大津波』（語りつぐ・証言）を3冊刊行している。また福島県伊達市の「梁川ざつと昔の会」は県の依頼を受けて県内の仮設住宅を中心に、被災者支援の文化活動として昔話の語りをおこなっている。
- (14) 遠野市『遠野 市制20年の歩み』、1976年3月、pp.125-126.
- (15) 石井正己『遠野の民話と語り部』三弥井書店、2002年所収、Ⅴ卒業作文としての昔話集—『遠野郷昔噺集』の足跡、Ⅵ福田八郎さんと民話—『遠野の民話』『昭和48年1月冬休み民話集』の発刊、Ⅶ遠野民話同好会と語り部—『遠野の昔話』の意義、参照。
- (16) 遠野民話同好会編『日本の昔話10 遠野の昔話』日本放送出版協会、1975年。
- (17) 前掲、『遠野の民話と語り部』、pp.117-118.
- (18) 佐々木徳夫編『遠野の昔話』桜楓社、1985年。「昔話を訪ねた半世紀—遠野昔話発掘の軌跡」（対談 佐々木徳夫・石井正己）『遠野物語研究』第11号、遠野物語研究所、2008年、参照。
- (19) 工藤紘一編『遠野むかしはなし 鈴木サツ昔話集』熊谷印刷出版部、1990年、同編『続続遠野昔はなし 正部家ミヤ昔話集』熊谷印刷出版部、

1993年。

- (20) 後藤総一郎監修・遠野常民大学編『注釈遠野物語』筑摩書房、1997年。
- (21) 『石橋勝治著作集 1 自治・自主教育の開拓―戦前編』あゆみ出版、1984年所収、Ⅲ 遠野教育―学習主体の自主学習、集団学習、自治の学級経営・学校社会の経営、生産教育、生活教育、総合教育、綴り方教育、参照。
- (22) 同、城丸章夫「解説」、p.368.
- (23) 高柳俊郎は、みずから受けた生産教育的な工作の授業を記憶しており、「子どもを思いやる生活教育」を広げた石橋勝治の実践を「遠野教育の実践と考えている」と述べている。遠野物語研究所所長高柳俊郎氏へのインタビューより（2012年10月22日、於遠野物語研究所、聞き手 佐藤一子）
- (24) 前掲、『注釈遠野物語』、p.2.
- (25) 前掲、『遠野 市制20年の歩み』、p.126.
- (26) 梅田取得（遠野市民センター所長）は、「遠野市民憲章は『参加・連帯・協調』を基調としておりますが、これは自治省のコミュニティに関する対策要綱の精神と何ら異なるところがありません」と述べている。「コミュニティと住民参加行政」日本地域開発センター編『トオノピアプラン―自立する都市・遠野からの報告』清文社、1982年、p.30.
- (27) 前掲、『遠野 市制20年の歩み』、p.159.
- (28) 遠野市新基本計画策定委員会『遠野市総合計画』1981年、p.60.
- (29) 同、pp.125-127.
- (30) 前掲、『トオノピアプラン―自立する都市・遠野からの報告』、p.42.
- (31) 前掲、『遠野 市制20年の歩み』、pp.158-159.
- (32) 前掲、『トオノピアプラン―自立する都市・遠野からの報告』、pp.48-49.
- (33) 同、pp.82, 86.
- (34) 岩手県遠野市総合計画 基本構想『遠野スタイルが創造する永遠の日本のふるさと遠野』2006年、pp.6-9. 岩手県遠野市『遠野市過疎地域自立促進計画』平成22年9月、p.7.
- (35) 同、『遠野スタイルが創造する永遠の日本のふるさと遠野』、p.12.
- (36) 同、p.21.
- (37) 同、「前期基本計画」Ⅱ計画の大綱、p.26.
- (38) 同、『前期基本計画』ビジョン1、pp.1-2.
- (39) 同、pp.79-80.

- (40) 同Ⅱ 大綱別計画・大綱1「自然を愛し共生するまちづくり」、p.12.
- (41) 「遠野遺産認定条例」(2007年3月)によって、地域づくり団体等から推薦があるものを市が認定する。2012年までに6回の認定によって114の遺産がリストアップされた。遠野遺産には有形文化遺産、無形文化遺産、自然遺産、複合的遺産が含まれ、「郷土の特徴を象徴しているもの」「市民によって保護されているもの」を認定対象としている。
- (42) 遠野市文化研究センター・文化課長太田隆宏氏へのインタビューより(2012年7月6日、於遠野市立図書館、聞き手 佐藤一子)。
- (43) 同、『後期基本計画』2010年、pp.109-110.
- (44) 佐藤一子「被災地支援の学びと連帯」石井山竜平編『東日本大震災と社会教育—3.11後の世界にむきあう学習を拓く』国土社、2012年、参照。遠野市社会福祉協議会の佐藤正市氏へのインタビュー(2012年2月27日、於遠野市浄化センター、聞き手 佐藤一子)をはじめ、遠野市職員の複数の方々からの聞き取りによる。高原の放射能汚染については、『朝日新聞』「プロメテウスの罫」(遠野ショック)2012年12月11日～25日朝刊、参照。
- (45) 遠野市『遠野物語百周年記念誌』2010年。一過性のイベントに終わらせないために市民企画委員会が発足し、2年間に大小250の事業が催された。遠野「語り部」1000人プロジェクトは、遠野市中心市街地活性化協議会によるとりくみで、国の2009年度地方の元気再生事業に選定された。
- (46) 「ヨミダス歴史館」新聞キーワード検索。<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>(2012年1月18日閲覧)
- (47) 遠野物語研究所・研究員佐藤誠輔氏へのインタビューより(2012年2月26日、於遠野物語研究所、聞き手 佐藤一子)。
- (48) 同。
- (49) 前掲、「昔話を訪ねた半世紀—遠野昔話発掘の軌跡」、pp.6-12, より抜粋。
- (50) 同、p.4.
- (51) 前掲、『遠野物語と21世紀—近代日本への挑戦』、pp.153-205。「遠野の語り部たち」は『遠野物語研究』別冊1として抜き刷りも作成されている。
- (52) 同、高柳俊郎「辻石谷江」、pp.154-155.
- (53) 同、佐藤誠輔「鈴木サツ」、pp.164-165.
- (54) 同、佐藤誠輔「正部家ミヤ」pp.172-173.
- (55) 同、大橋進「北川ミユキ」、pp.158-159.

380 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

- (56) 同、佐藤誠輔「阿部ヤエ」、pp.182-183.
- (57) 前掲、「昔話を訪ねた半世紀」、p.11.
- (58) 前掲、高柳俊郎氏へのインタビューより。前掲、『注釈遠野物語』、参照。
- (59) 「遠野物語研究所の現状と課題」(一)『遠野物語研究』第8号(特集 遠野物語研究所創設10周年)、遠野物語研究所、2005年3月、p.31.
- (60) 同、佐藤誠輔「語り部教室(昔話教室)の歩み」、pp.86-87.
- (61) 同、p.87.
- (62) 同、p.86.
- (63) 「遠野物語研究所の現状と課題」(二)前掲、『遠野物語研究』第8号、p.54.
- (64) 前掲、佐藤誠輔氏へのインタビューより。
- (65) 前掲、『遠野物語と21世紀』、参照。
- (66) 同、佐藤誠輔「語り部の育成」『遠野物語と21世紀』、p.206.
- (67) 同、石井正己「いろり火の会の活動」、p.188.
- (68) 正部家ミヤ氏へのインタビューより(2012年5月27日、於正部家宅、聞き手 佐藤一子)。
- (69) 前掲、高柳俊郎氏へのインタビューより。
- (70) 前掲、佐藤誠輔氏へのインタビューより。
- (71) いろり火の会会長工藤さのみ氏へのインタビューより(2012年2月26日、於市立図書館会議室、聞き手 佐藤一子)。以下の語りも同インタビューから引用している。
- (72) 前掲、『遠野物語研究』第8号、p.93.
- (73) 前掲、工藤さのみ氏へのインタビューより。
- (74) 同。
- (75) 梁川ざっと昔の会の会長、横山幸子氏へのインタビューより(2012年10月28日、於梁川町伝承園、聞き手 佐藤一子)。横山幸子氏は1931年東京生まれで、昔話との出会いは50歳の時である。「語り部」という呼称を避けて「お話しおばさん」として活動している。
- (76) 釜石漁火の会会長、須知ナヨ氏へのインタビュー(2012年7月8日、於須知宅、聞き手 佐藤一子)。なお須知ナヨは、菊池力松の末娘で鈴木サツ、正部家ミヤの妹にあたる。結婚して釜石市に移住、自営業のかたわら釜石で遠野の昔話を語り続けてきた。
- (77) 前掲、工藤さのみ氏へのインタビューより。

- (78) 遠野市『遠野物語百周年』2010年、pp.144.
- (79) 前掲、工藤さのみ氏へのインタビューより。

ABSTRACT

Citizens' Oral Activities of Folk Tale and Development of Community Learning : A Case Study of Community Development of City of Tono in the Iwate Prefecture as a "Home Village of Folk Tale".

Katsuko SATO

In this research, is focused the community development as "the home village of a folk tale" of City of Tono, Iwate prefecture and analyzed the citizens' oral activities of folk tale from the viewpoint of succession of traditional culture, and development of community learning.

The oral tradition of the folk tale of Tono is connected also with activities of the various local circles of folk tale in the contemporary society. In the case of Yamagata Prefecture, the conservation of the local traditional cultures, such as a folk tale and a traditional drum, is promoted as community learning movement in all cities, towns and villages in the prefecture. Furthermore, in the face of an East Japan great earthquake, the narrator group of the folk tale in a stricken area has extended the activity which shares memory of an area with a disaster victim.

In this paper, I try to position oral activities of folk tale as a practice of cooperative community learning such as small circle movement in 1950s, and peoples' writing activities of a personal history in 1970s, etc., which contribute to identity formation of a community through expressive activities. This paper is yet a preliminary consideration, and I will continue to analyze the life-story of narrators of folk tale and consider the role of them for construction of a common interesting community.